

ワシントン情報、裏 Version

2004年8月6日

竹中 正治

「ジョン・ケリーの苦心とハンチントン教授の憂国」

【対テロ戦時下の大統領選挙】

民主党の大統領候補を正式に決定する党大会が7月26～29日ボストンで開催され、予定通りジョン・ケリー候補が選出された。29日に行われたケリー候補の大統領候補指名受諾演説は全国ネットのTVで放映され、民主党員のみでなく、米国の有権者全体にケリー候補が大統領とし相応しい人物であるという印象を与えることができるかどうかを試された重要なものであった¹。

演説の冒頭ケリー候補は、軍隊式の敬礼をして “I am John Kerry, and I am reporting for duty.” と述べた。言うまでもなく、これは軍人が任務上の報告を行うやり方であり、同氏がベトナム戦争に従軍して軍功を重ねたことを想起させるパフォーマンスである。米国では現在も恒常的なテロ警戒が解かれることなく、「9・11後」の状況が続いている。9・11とは米国人にとっては、「不意打ちを仕掛けられた戦争」であり、「対テロ戦争」は現在も継続しているのである。従って、ケリー候補は、自分がブッシュ大統領よりも有能、かつ効果的に対テロ戦争を勝利し、米国民の安全を確保できる大統領候補であることを印象付けようとしたのである。このことは、「イラク戦争は間違っていた」と現在考えている民主党有権者の多数ばかりでなく、中間派、更には保守派の共和党支持層の一部も味方につけるために必要なアピールとして考案されたと考えられる。

【ケリー演説の綱渡り的な苦心】

国家安全保障問題に演説の半分を割いた後、ケリー候補はアメリカ的価値観とそれを実現し守るための米国民の結束を強調し、それを象徴するものとしての天井の巨大な星条旗を指差した。彼は演説後半において “Value” という言葉を多用する。それは米国民の多数が結束して実現し、守るべき「アメリカ的価値観」を意味しているのである。彼が “Value” という言葉に直接関連して述べたキーワードを列挙すると以下の通りである。

- 1、自由、民主主義
- 2、家族愛
- 3、信仰・信条 (Faith)、機会 (の平等)、(社会への) 責任感
- 4、勤労 (あるいは雇用)
- 5、ミドルクラス (中間層の繁栄)、製造業の再生、技術開発、輸出競争力
- 6、健康保障 (Health Care)
- 7、経済的自律性 (中東原油に依存しないというエネルギー政策との関連)

こうした抽象的な各キーワードに続いて、演説では更に具体的なケリー候補の施策、例えば中間所得層への減税と高額所得者 (年間所得 20 万ドル以上) への増税 (=過去の減税の撤回) などが各論として述べられた。

¹ 対する共和党の党大会は8月30日～9月2日に開催される。

これら「アメリカ的価値（観）」として掲げられたキーワードは、現代の先進国においては、それ自体いずれも反対のしようがないものばかりである。演説の中で信仰・信条（Faith）という言葉も使用されたが、その内容を特定することはケリー候補にはできない。プロテスタント、カトリック、イスラム、仏教徒、無神論者、同性愛者、これら皆、リベラルな価値観を擁護するケリー候補にとって大切な支持者だ。その多様化した支持者を前にケリーは“God”という言葉さえ使えない。そこで星条旗を連帯の象徴として強調したのだ。彼の演説の苦心は、広範で多様な民族、宗教、文化から構成される民主党の支持層プラスαの人々を包含しつつ、その結束と求心力を自分への投票に向かわせるといった綱渡り的な演出にある。ブッシュ大統領なら、こんな手の込んだ微妙な演説はしない、あるいはできない。

【ハンチントン教授の憂国】

著書「文明の衝突」で有名なハンチントン教授の最新著書“Who are we? The Challenges to America’s National Identity”（邦訳タイトル「分断されるアメリカ」）が話題を呼んでいる。この書は、漠然と意識されているが、その難しい問題の性質上、公の場では一般に突き詰めて議論されることの少ない現代アメリカの抱える不安の構造を浮き上がらせている。すなわちアメリカ社会が益々、多民族化、他宗教化、多文化化、そして最後には多言語化して行く結果、果たして「アメリカ」としてのナショナル・アイデンティティーを維持できるか？という問いかけである。アメリカの独立から 1940 年頃まではアメリカ社会は、人種、民族、文化（宗教）、政治信条の 4 面にわたって明確なナショナル・アイデンティティーが存在していた。白人、特にアングロサクソンを中心とするプロテスタントの倫理を基に、自由・民主主義、個人主義を信条とする社会だった。それは北米大陸に入植し、独立戦争を経てこの国の基盤を建設した人々のアイデンティティーであり、その後の移民もそうしたアイデンティティーに同化した。

しかし 20 世紀の半ば頃から、同化政策が弱まり、ついには解消され、一方で中南米、アジア、その他地域からの移民が増え続けた。最後には言語さえ二重化（英語とスペイン語）する傾向を見せている。とりわけメキシコからの大量の移民の流入問題を語る時、教授の懸念はピークに達する。メキシコからの移民は現代のアメリカの移民問題の中核をなしていると言う。陸続きの長い国境線を越えてやって来る彼らは、他のどの移民グループに比べても特殊であり、カルフォルニアなど南西部の州に居住が集中し、教育への志向と水準が低く、言語的、文化的同化が最も遅れている。アメリカの文化的な統合のみならず、将来の「政治的な統合を脅かす潜在的な脅威」であると述べている²。

こうした結果 21 世紀のアメリカはナショナル・アイデンティティーを保てるだろうか？この問いに対する教授の姿勢は懐疑的であるが、簡単に結論も導か

² 2004 年 3 月に発表された National Census Bureau の予測によると、2050 年には「白人」人口は全体の 50% となり、ヒスパニック人口は 24% となる。ただし過去数年の人口変化を単純に前提に推計すると、この変化はもっと早く到来し、白人は 21 世紀半ばにはマイノリティーに転じる。

ない。これは未曾有の問題であり、今後の実践と試行錯誤にかかっていると考えているのであろう。

【国家論の視点から見たハンチントン教授の主張の意味】

ハンチントン教授のこの著書は、物議を醸し出す要素に満ちていて、面白い。ここからは私の解釈である。思想、信条、宗教の自由を含む基本的人権を擁護・尊重する現代の民主主義国家では、政治と宗教、より広義には「公」と「私」は明確に区分されている。政府が特定の宗教を強制することも、支持することも禁止されている。宗教、価値観は私的な個人の内面に係わる事であり、それに政府が介入することはできない。これは個人の自由と尊厳を守るための原則である³。

従って現代の国家は自由、民主主義、基本的人権の政治的な原則、枠組みのみで原理的には成立していることになる。この原理が全てであるならば、一つの国家は異なった民族、異なった文化、異なった宗教、異なった言語の人々を包摂して機能を果たすことができる。

ところがハンチントン教授の懸念は、そうした政治的な原則・信条に関する一致のみで、本当に国家的には有効に機能し得るのかと問うことを意味する。民主主義国家の原理がまがりなりにも有効に機能して来たのは、特定の地域で歴史的に形成されて来た言語、文化、宗教的な統一性がその基底にあったからなのではないかと言う問いに行き着く。自由・民主主義の政治原理は現代国家の「表層」とまでは言わなくても、法理論的な上部構造に過ぎず、国家の社会的な基底、もっとざっくりばらんに言うと「国家の下半身」には、利害を巡って同類が結束し、異類を排除する非理性的な衝動が潜んでいるのではないか。そうであるならば、文化的な断層の広がりはどこかで臨界点をむかえ、国家は分裂することになる。

同じように異民族、異文化、多言語の人々を包摂したソビエト連邦は崩壊して、民族諸国家に分裂した。勿論その原因はソ連邦内部の文化的な多様性の拡大のみ帰されるものではない。ソビエト連邦の崩壊・分裂には、中央指令型経済システムの行き詰まり（経済建設の初期と戦時下においては有効性を発揮したシステムだったが）が根底にあるし、自由、民主主義、基本的人権に関する抑圧が制度化されてしまっていたこともあろう。しかし 20 世紀の初頭にソ連邦を構築した人々も、アメリカとはイデオロギーこそ違え、近代西欧の啓蒙主義的な思想を継承しており、国家は民族、文化、言語の相違を越えた存在として人々を包摂できるという前提で国家を建設したのである。旧ソ連邦体制の終焉は、「ソ連邦の民主化・自由化」には至らず、民族諸国家への分裂に帰着した。東欧に拡大した EU の人々も、トルコの EU 加盟要望に対しては、本心では背を向けている。西欧は東欧までなら包摂できるが、そこから東は異文化圏だからである。

³ この基本的な問題を考える上で、「憲法と平和を問いなおす」長谷部恭男、ちくま新書、2004 年、は優れた本である。

【現代民主主義国家モデルの直面する歴史的な試練】

アメリカが、そうした地理的・歴史的に形成されてきた文化的な統一性を失って、政治原理のみの一致による「人工国家」として発展を継続できるのか？あるいは将来における政治的、国家的な分裂に至るのか？このように考えると、アメリカにおける移民の増加と文化的な多様化、多元化の問題は、アメリカだけの問題ではない。西欧啓蒙主義の倫理を基底にした現代民主主義国家モデルの有効性の限界が問われているのであり、この歴史的な試練が未曾有の規模でアメリカで始まっているのである。その最終帰結を 1927 年生まれのハンチントン教授が見とどけることはおそらくできないだろうが、1956 年生まれの私は、その帰趨を目撃することができるかもしれない。

以上